

# 2022 年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告 (第 2 報)

## — 2 年次末の指導教員決定に向けて —

神谷 哲司・後藤 武俊・佐藤 克美・若島 孔文・小嶋 秀樹・野口 和人  
東北大学大学院教育学研究科

### 要約

本研究は、2022 年度（令和 4 年度）入学生から始まった新たな学部専門教育課程のありかたを検討するため、指導教員の希望を提出した 2 年次終わり時点での学生を対象にアンケート調査を実施し、2 年次の指導教員決定の経緯ならびに希望する進路先の状況を明らかにすることを目的とした。2024 年 1 月 30 日から 2 月 14 日までの間実施されたオンライン調査で 57 名（回収率 76.0%）から回答が得られ分析に用いた。また、1 年次に回答が得られた 64 名のデータと連結し、1, 2 年次ともに協力を得られた 52 名についても分析を行った。結果として、指導教員決定について、熟慮を要する学生もいたものの、多くの研究室訪問をすることで、概ね指導教員について決定していた姿がうかがえていた。また、1 年次の必修の「教育学への招待」「教育学研究入門」の受講評価はこの指導教員の決定状況と関連は見られなかったが、1 年次に比して 3 年次の専門課程に向けての肯定的感情の向上と否定的感情の低下が確認された。卒業後の進路の検討先についての 1 年次との比較を見ても、「東北大学への大学院進学」も大きく減少はしていなかったが、全体として民間企業の多さは変わらず、国家・地方公務員の選択肢を新たに選ぶものの多さが顕著であった。また、大学院の進学についても、必ずしも教育学研究科への進学を考えるだけでなく、東北大学の他の研究科も含めて、多様に検討している姿が示唆されていた。

キーワード；カリキュラム，教育学，進路選択，学部教育，大学院進学

### 【背景と目的】

2022 年度入学生から始まった東北大学教育学部の新カリキュラムであるが、その検討段階での主な論点は、1) 学部教育におけるコース・指導体制のあり方、2) 学部共通科目（必修科目）のあり方、であり、その 2 点を踏まえて、3) 学部専門科目の履修の流れを整えることであった。具体的には、コース・指導体制のあり方については、教育学コース・教育心理学コースの 2 コース体制を維持したまま、コースの決定、所属時期を旧カリキュラムの 4 セメ開始時（2 年次 10 月）から、3 セメ開始時（2 年次 4 月）に繰り上げること、指導教員の決定、研究室配属の時期も旧カリキュラムの 3 年次 7 月から、3 年次 4 月（2 年次末、3 月中旬の教授会にて決定）に繰り上げることになった。そして、それらの前倒しに対応すべく、一部学部専門授業の早期開講と、1 年次必修科目としての「教育学

への招待」の新設（1セメ），ならびに2セメの「教育学研究入門」の刷新が行われた（神谷・後藤・佐藤・小嶋・野口，2023）。

1年次終わりに収集したデータを報告した前報（神谷ほか，2023）では，令和4年度新入生から始まった東北大学教育学部の新カリキュラムのあり方について，1年次終わりのコース選びに際して，新設・一新された「教育学への招待」「教育学研究入門」の受講に対する意識や1年次の終わりに前倒しになったコース決定を中心に検討していた。そこでは，今後の学修に対する自信については，受講したい授業や学びたい専門分野を決める自信が比較的の高いものの，卒業研究のテーマや指導を希望する先生などの決定はまだ不透明なところも多く，ポジティブな感情と同様にネガティブな感情も抱えていることがうかがえていた。そのため，指導教員決定などについては，2年次以降のオリエンテーションをはじめ，コースごとの説明会や，さまざまな学部授業を通して，具体的な方向性をイメージできるよう情報提供を進めていくことが必要であると指摘されていた（神谷ほか，2023）。

それらを踏まえ，本報では，2022年度入学生が2年次を終えるにあたり，研究室配属を決定するための指導教員の決定の経緯と，現時点での希望進路を中心に，2年次の終わりに実施されたアンケート調査の結果を報告することとする。

加えて，今回の新カリキュラムのねらいの根底には，大学院への内部進学者が減少しているという認識の下，学部から大学院への接続をいかに構築するべきかという問題意識があり（神谷ほか，2023），そのためには進路模索が本格化する3年次春には指導教員を決定する必要があるという結論に至っていたこと（学部カリキュラム改革ワーキング・グループ，2021），そこでは新入学時（第1セメスター）に学部専門科目が開講されておらず，学生の学ぶ意欲が減退してしまっているとの認識もあったことから，カリキュラムの前倒しの必要性も指摘されていた（神谷ほか，2023）。それゆえに，前述のように，従前の教育学研究入門（1年次2セメ）の内容を単なる研究紹介から学部教員全員の研究紹介へと再構築し，さらに新たな導入科目として「教育学への招待」（1年次1セメ）を新設することとなっていた。そのことを踏まえて，これら教育学への招待，教育学研究入門の受講についての評価と指導教員決定についての経緯についての関連についても検討を行うものとする。

なお，具体的な指導教員決定の流れについては以下の通り。入学当初より，2年次の後期に指導教員決定があることは入学時のオリエンテーションや教育学への招待等で告知されていたが，2年次後期のオリエンテーション（2023年9月29日）で改めて指導教員の希望調査について説明がなされるとともに，基礎資料となる教員プロフィールが配布され，「必ず複数の教員と」面談を行うように指導された。指導教員の希望調査の締め切りは同年12月21日であり，Googleフォームで教務係に提出することとなっていた。その後教務委員会において，配属の調整が行われ，必要に応じて再度の面談期間が設けられる

場合もあり、最終的には 3 月中旬の教授会で正式に決定することとなる。ただし、後述するように、今回の 2 年生を対象としたアンケート調査は 2024 年 1 月下旬から 2 月中旬にかけて実施されたものであり、12 月 21 日締め切りの希望調査の結果について、指導教員決定の調整が行われている間に収集されたデータである点は留意が必要と思われる。

## 【方法】

2 年次のカリキュラムを終えた時点において、2022 年度入学の学部 2 年生を対象にアンケート調査を行った。アンケートは Google Forms で作成され、フォームの冒頭に調査の趣旨と、1 年次の終わりに実施した調査の追跡調査であることを踏まえて協力依頼が説明されるとともに、協力は任意であること、入力にあたってはメールアドレスが収集されること、そのメールアドレスは追跡調査のデータ連結のためだけに使用され、分析担当者以外は目にしないこと、分析にあたってはメールアドレスが削除されたものを分析に使用し、統計的に処理するとともに、自由記述欄のコメントも誰のものかわからないものとして処理すること、などが明記された。

調査時期は、2024 年 1 月 30 日から 2 月 14 日まで。1 月 30 日夕刻に学生にアンケート協力依頼のメールを一斉に配信するとともに、学部の掲示版や SNS で協力を呼び掛け、3 度にわたるリマインダメールを送信し、同月 14 日 23 時に協力を締め切った。締め切り時点で 56 名の協力が得られていたが、その後、16 日深夜までに 1 名のさらなる協力が得られたため、それらをすべて分析対象とした。調査対象となった学部 2 年生の在籍人数は 75 名であり、そのうち 57 名から協力が得られたこととなる（回収率 76.0%；教育学コース 25 名、教育心理学コース 32 名）。また、1 年次の回答項目との関連を検討するために 1 年次データとの連結を行った。その際、神谷ほか（2023）における 1 年次データの回収数 62 名のほかに、新たに 2023 年 4 月 1 日までに 2 名の協力者が得られていたことが判明したのでその 2 名を加え、1 年次 64 名、2 年次 57 名のデータを連結した。その結果、1、2 年次に共に協力が得られているデータは、52 名（有効回答率 69.3%）であった。

2 年次の具体的な調査項目は以下の通り。

Q1: 現在所属するコース：教育学コースと教育心理学コースの 2 択で尋ねた。

Q2: 所属するコースへの意識（コース所属感）：現在所属しているコースについてどのように認識しているのかについて、「あなたは、現在所属しているコース（教育学コース、教育心理学コース）について、以下のようなことについてどのように感じていますか。「そう思う（5）」から「そう思わない（1）」の中から、最も当てはまるもの 1 つにチェックを入れて下さい」と尋ねた。質問項目は、原田・滝脇（2014）の社会的居場所尺度などを参考に独自に 5 項目作成した。

Q3: 研究室訪問開始時期：いつ頃から研究室訪問を開始したのかについて、「2023 年 9 月かそれ以前」と 10 月から 12 月の各月の前半・後半に分けた 7 つの選択肢から 1 つ選ん

でもらった。

Q4: 研究室の訪問数: 研究室を訪問した数を、「0人(訪問していない)」、「1名」、「2名」、「3~4名」、「5~6名」、「7~8名」、「9名以上」のうちから1つ選んでもらった。

Q5: 指導教員決定の状況: 調査時点では配属研究室は決定していないため、12月21日までに教務係に提出した希望調査票で志望した指導教員について、どのような経緯で指導教員の志望を決定したのかについて尋ねた。

Q6: 指導教員決定の熟慮度: 志望する指導教員を決定するにあたり、どのくらい悩んだかについて、「ものすごく悩んだ(1)」から「まったく悩まなかった(5)」の5段階で尋ねた。

Q7: 3年次進級にあたっての気分: 1年次に指導教員決定について考えた時の気持ちを尋ねたのと同様、3年次に進級するにあたっての気分を「三年生の春から、指導教員が決定し、本格的に専門課程での学びが始まります。このことについて考えた時、今あなたはどのような気持ちですか。」と尋ね、「非常にあてはまる(6)」から「ほとんどあてはまらない(1)」の6件法で回答してもらった。1年次同様、感情価の測定については、一般感情尺度(小川・門地・菊谷・鈴木, 2000)の24項目のうち、3つの下位尺度(肯定的感情, 否定的感情, 安静状態)からそれぞれ1年次の「コース決定時の気持ち」について尋ねている項目と同じものを4項目ずつ採用し、12項目尋ねた。

Q8: 指導教員決めの際に悩みや欲しかった情報 指導教員決めの際に悩みや欲しかった情報について自由記述で尋ねた。

Q9: 指導教員変更手続きの認識: 「あなたは3年次の夏に、定員に空きがある研究室であれば、指導教員の変更ができることを知っていますか」と尋ね、「知っている」「知らない」から選択するように求めた。

Q10: 転コースの認識: 2年次の7月に告知されていた受け入れに空きがある場合の転コースについて、「あなたは2年次の7月に、受入学生数に余裕があるコースであれば、転コースができることを知っていましたか。」と尋ね、「知っていて、実際に転コースをした」「知っていたが、転コースはしなかった」「知らなかった」から1つ選んでもあった。

Q11: 卒業後の希望進路(複数回答): 1年次と同様、「卒業後の進路について現時点で検討しているもの」を複数回答で回答してもらった。ただし、今回は、前年の選択肢にあった「東北大学の大学院進学」という選択肢を「東北大学大学院教育学研究科への大学院進学」と「東北大学の他の研究科への大学院進学」に細分化して、9項目とした。

Q12: 卒業後の希望進路(単一回答): さらにQ11の希望進路選択先から、「現時点であなた自身が卒業後の進路として第1志望としているものはどれですか?」と尋ねた。

Q13: 大学での学生生活全体についての満足度: 昨年同様「大変満足している(5)」から「まったく満足していない(1)」の5件法で尋ねた。

Q14: 教育学部での学びの満足度: また、2年次になり学部専門科目も増加してきたこと

から、教育学部での学びの満足度について、「現時点における東北大学教育学部での学び（学修状況）についての満足度をお聞かせください。」と尋ね、「大変満足している（5）」から「まったく満足していない（1）」の5件法で回答してもらった。

また、上記の項目のほか、本報告では1年次に尋ねていた、コース決定について考えた時の感情3下位尺度、1年次必修科目である「教育学への招待」「教育学研究入門」の受講に対する評価各3項目、1年次の卒業後の希望進路についても分析に用いることとした。

### 【結果と考察】

まず、Q2 コース所属感についてしてみると、逆転項目として設定した「3.今でも現在所属するコースでよかったのか悩んでいる」以外は、いずれも「そう思う」「ややそう思う」が90%を超えており、概ね所属するコースに対する所属感は得られていることがうかがえる（Table1）。

Table1 コース所属感

	そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	そう 思わない
1.現在所属するコースを選んでよかった と思っている。	34	17	5	1	0
2.現在所属するコースのカリキュラムで 学ぶのが楽しみだ。	32	20	4	1	0
3.今でも現在所属するコースでよかった のか悩んでいる	5	10	1	25	16
4.現在所属するコースには自分の居場所 があると感じている	18	24	10	4	1
5.現在所属するコースでの学びで自分が 成長できそうだと感じている。	24	27	5	0	0

N=57

Q3 研究室訪問の開始時期については、10月後半までは5名以下で11月から10名を超えていることから、11月に入ってから本格化したものと思われる（Figure1）。また、Q4 訪問した研究室の数（Figure2）は最頻値が「3～4名」（28名）であり、次いで「2名」（21名）であった。また、9名以上と回答した者も1名いた。指導教員希望調査票には第2希望まで記入する欄があり前提として「必ず複数の教員とコンタクトをとる」ようになっているが、半数以上は3名以上の教員と面談を行っていることが示されている。

Q5 指導教員の決定にあたりどのような状況であったのかについて尋ねた質問（Figure3）でも、「研究室訪問前から概ね2、3名に定まっており、その中から訪問後に志望する先生を決めた。」と回答した者が33名と最も多く、次いで「研究室訪問前から概ね1名に定ま

っており、訪問後に同じ先生を第1志望に決めた。」が11名、「研究室訪問前には特に定まっていなかったが、いくつか訪問する中で第1志望とする先生を決めた。」10名の順であり、訪問前に数名まで絞り込んでいた者が77.2%ほどであった。さらに、この研究室の訪問数と指導教員決定の状況のクロス表を見てみると (Table2)、3名以上の研究室訪問を行っているものは事前に「特に定まっていなかった」傾向が見て取れ、研究室訪問によって指導教員の希望が絞られたプロセスがうかがえる。

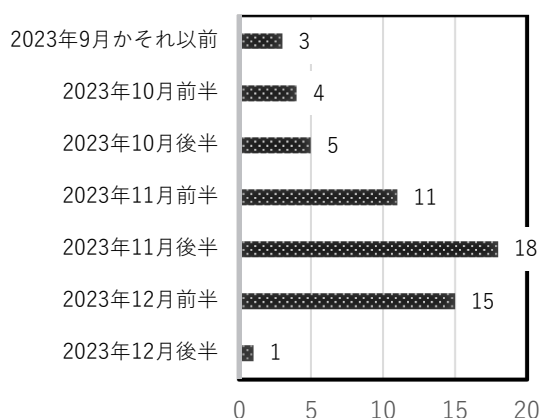


Figure1 研究室訪問の開始時期

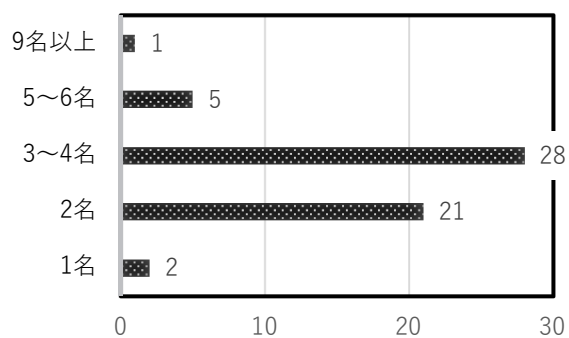


Figure2 研究室訪問の訪問数

研究室訪問前から概ね1名に定まっております、訪問後に同じ先生を第1志望に決めた。

概ね2、3名に定まっております、その中から訪問後に志望する先生を決めた。

特に定まっていなかったが、いくつか訪問する中で第1志望とする先生を決めた。

特に定まっていなかったが、訪問して、なんとなくよさそうな先生を第1志望にした。

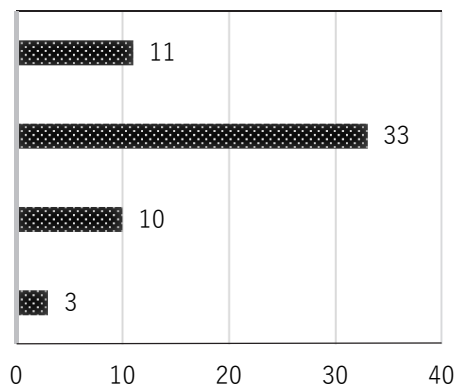


Figure3 指導教員決定の状況

Table2 研究室訪問の訪問数と指導教員決定の状況のクロス表

Q5 指導教員決定の状況	Q4 研究室訪問の訪問数					合計
	1名	2名	3~4名	5~6名	9名以上	
研究室訪問前から概ね1名に定まっており、訪問後に同じ先生を第1志望に決めた。	1	7	2	1	0	11
概ね2, 3名に定まっており、その中から訪問後に志望する先生を決めた。	1	14	15	3	0	33
特に定まっていなかったが、いくつか訪問する中で第1志望とする先生を決めた。	0	0	9	1	0	10
特に定まっていなかったが、訪問して、なんとなくよさそうな先生を第1志望にした。	0	0	2	0	1	3
合計	2	21	28	5	1	57

また、Q6 指導教員決定についての熟慮度（Figure4）は、「まったく悩まなかった（1）～ものすごく悩んだ（5）」の5件法で「2」と回答した者が24名（42.1%）と最も多かった一方で、「4」「ものすごく悩んだ（5）」と回答した者も合わせて24名（42.1%）であり、熟慮を要した学生とそうでない学生に二分化している傾向が示されたといえよう。確認として、先の指導教員決定の状況の4群を訪問前から1名に決まっていた「確定群」、2, 3名に絞り込んでいて訪問で決めた「確認群」、事前には特に定まっていなかった残り2群を「探索群」という3群に分け、この群間で熟慮度に差があるかどうかを見たところ、確定群で  $M=2.00$ ,  $SD=0.45$ , 確認群で  $M=3.00$ ,  $SD=1.03$ , 探索群で  $M=4.15$ ,  $SD=1.14$  と確定群よりも確認群、確認群よりも探索群の方が、指導教員決定についての熟慮度が高かった（ $F(2,54)=14.64$ ,  $p<.001$ ,  $\eta^2=.35$ , 多重比較は Bonferroni による）。

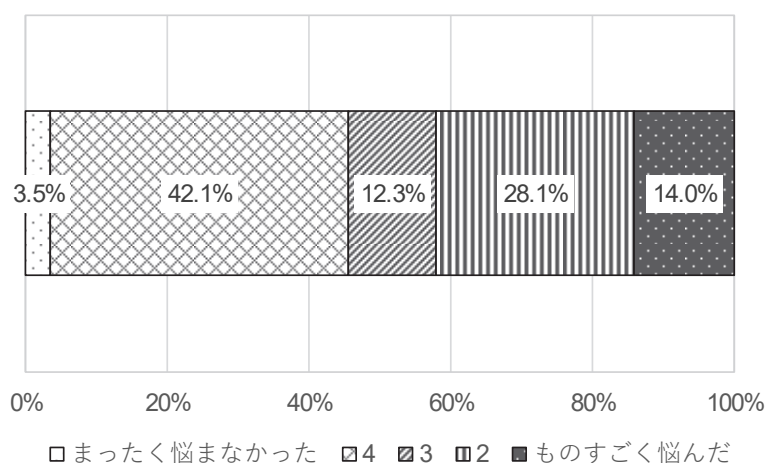


Figure4 指導教員決定の熟慮度

次に、「教育学への招待」「教育学研究入門」の受講の評価と指導教員の決定の経緯との関連について検討する。まず、1年次の「教育学への招待」「教育学研究入門」の評価項目各3項目を科目ごとに主成分分析を行い1成分性が高いこと（教育学への招待で負荷量は.80-.86，寄与率69.23%，教育学研究入門で負荷量は.65-.85，寄与率77.10%），ならびに内的整合性（同順に $\alpha=.78, .85$ ）を確認し，科目ごとに評価得点を算出した。この2つの変数を従属変数，先の指導教員決定の状況の3群を独立変数とし，さらに，受講の評価は学生の生活満足度とも関連があることが想定されることから，受講評価を行った1年次時点での学生生活満足度を共変量とした多変量共分散分析を行った。その結果（Table3），学生生活満足度は教育学への招待（ $F(1,48)=9.04, p<.01, \eta_p^2=.16$ ），教育学研究入門（ $F(1,48)=6.59, p<.05, \eta_p^2=.12,$ ）で有意であったが，指導教員決定の状況は，いずれの科目でも有意ではなかった。

Table3 2年次の指導教員決定の状況と1年次必修科目授業の受講評価との関連

Q5 指導教員決定の状況	「招待」受講評価		「入門」受講評価		n
	Mean	SD	Mean	SD	
確定群	4.17	0.89	3.93	0.91	10
確認群	3.80	0.84	3.63	1.04	30
探索群	4.03	0.56	3.89	0.78	12
	F値	$\eta_p^2$	F値	$\eta_p^2$	
指導教員決定の状況(df=2/48)	1.28	.05	0.63	.03	
1年次学生生活満足度(df=1/48)	9.04	.16	6.59	.12	

\*\*  $p<.01$  \*  $p<.05$

加えて，Q7の3年次進級の気分について，1年次のコース決定を考えた時の感情との対比で検討するために，肯定的感情，否定的感情，安静状態の3下位尺度について，調査時期，下位尺度共に対応のある2要因分散分析を行った（Table4）。その結果，調査時の主効果  $F(1,50)=.50$  n.s.  $\eta_p^2=.01$ ，尺度間の主効果  $F(2,100)=33.12$   $p<.001$   $\eta_p^2=.58$ ，交互作用  $F(2,100)=20.75$   $p<.001$   $\eta_p^2=.46$  と尺度間の主効果と交互作用が有意であった。そこで単純主効果検定を実施したところ，年次比較について，肯定的感情は1年次より2年次の方が高く（ $F(1,50)=26.85$   $p<.001$   $\eta_p^2=.35$ ），否定的感情は1年次よりも2年次の方が低かった（ $F(1,50)=11.97$   $p<.01$   $\eta_p^2=.19$ ）。また，安静状態については測定時期で差は見られなかった。概して，1年次のアンビヴァレントな状態から肯定感情が上昇し，否定感情が低下していることが分かった。



Table4 指導教員決定について考えた際の感情

	1年次 <sup>1)</sup>		2年次 <sup>2)</sup>		
	平均値	SD	平均値	SD	
Q1_3PA（肯定的感情）	4.13	0.73	4.80	0.90	調査時の主効果 $F(1,50)=.50$ <i>n.s.</i> $\eta_p^2=.01$
Q1_3NA（否定的感情）	4.05	0.95	3.49	0.90	尺度間の主効果 $F(2,100)=33.12$ $p<.001$ $\eta_p^2=.58$
Q1_3CA（安静状態）	3.35	0.97	3.44	0.90	交互作用 $F(2,100)=20.75$ $p<.001$ $\eta_p^2=.46$

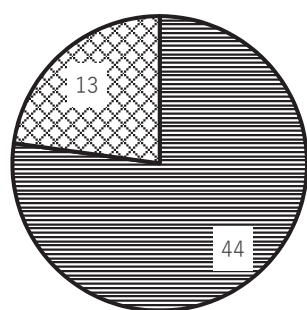
<sup>1)</sup> 指導教員決定について考えた際の感情(1年次)

$N=51$

<sup>2)</sup> 3年次進級について考えたときの感情(2年次)

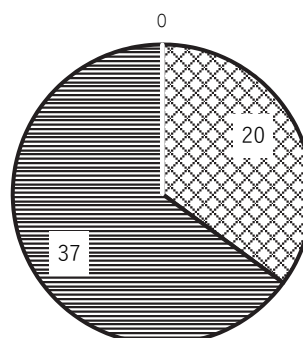
Q8 指導教員決定の際に悩んだことや欲しかった情報について、自由記述で回答を求めたところ、8名の記述があった。具体的には、「1学年上の代よりも半年ほど早く指導教員が決まるので、早まった分どのような指導を受けられるのかが特に気になった」「どこでゼミをどのように行っているかなどの情報が欲しかった。」「希望者が多かった場合、先生方は何を基準にして決定しているか（例えば成績など）を知りたかった。」「教育政策科学コースの教員の方々が、11月後半頃に軽いオリエンテーションを設けてくれた。他のコースの教員の方も時間があればそのような機会を設けてほしい。」「現在の学部生や院生の人数構成」「現状ゼミにどの学年が何人いるかを面談前に知りたかった。」「就職先と院に行く比率」「先輩の声」といった回答であった。

Q9 指導教員変更の手続きについての認識について尋ねたところ、「知らない」が44名（77.2%）、「知っている」が13名（22.8%）であり、「知らない」と回答した者が2/3以



■ 知らない  
▨ 知っている

Figure5 指導教員変更の認識



▨ 知らなかった  
■ 知っていたが、転コースはしなかった  
■ 知っていて、実際に転コースをした

Figure6 転コースの認識

上いることが示されている (Figure5)。一方, Q10 転コースについては, 「知っていたが転コースはしなかった」が 37 名 (64.9%), 「知らなかった」20 名 (35.1%) とこちらは過半数が知っていた (Figure6)。なお, 2022 年度入学生で 2 年次に転コースの希望を出した学生はいなかったため, 「実際に転コースをした」のは本調査の対象には存在していないことになる。

Q11 の「卒業後の進路として検討していること」は, 民間企業就職が 37 名 (64.9%) で最も多く, 次いで国家公務員・地方公務員が 28 名 (49.1%), 本研究科への大学院進学が 25 名 (43.9%), であり, 以下順に, 東北大学以外への大学院進学 13 名 (22.8%), 東北大学の他の研究科への大学院進学 7 名 (12.3%), 中学・高校の教諭 6 名 (10.5%) であった (Figure7)。また, 「まだ決まっていない」8 名 (14.0%), 「まだ考えられない」2 名 (3.5%) も見られていたがいずれも昨年の 14 名 (22.6%), 4 名 (6.5%) から減少していた。さらに複数回答の総計は 127 であり, 1 人あたり 2.23 の選択肢を選んで示された。これは, 昨年の 2.16 から微増しており, まだ進路については複数の選択肢で揺れていることが示されている。

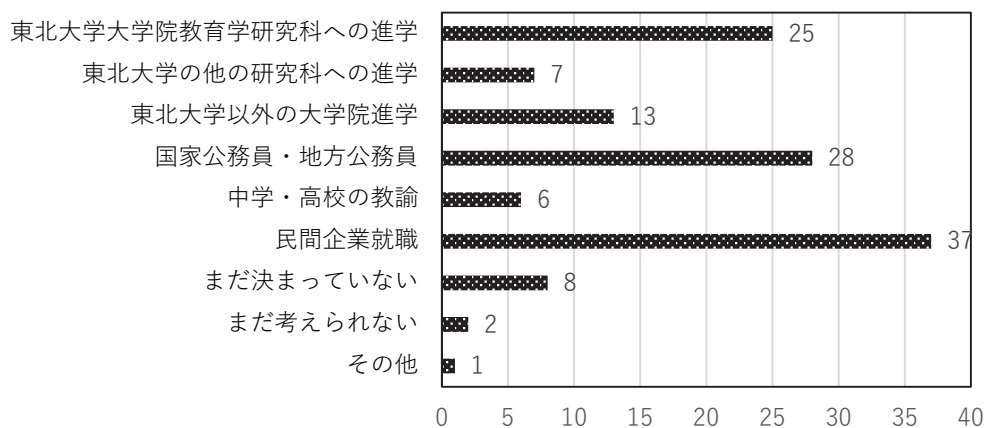
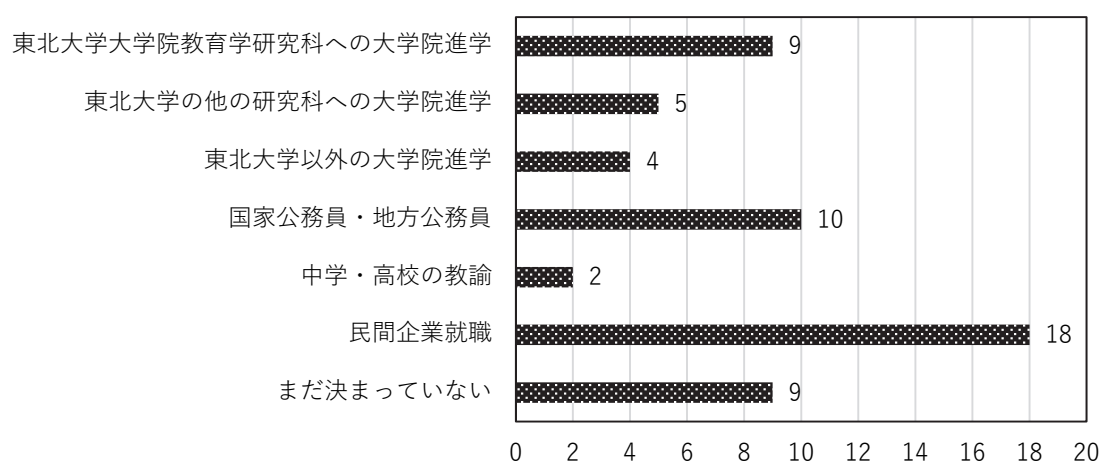


Figure7 検討している卒業後の進路 (複数回答)

さらに今年は進路について絞り込んできた学生もいることが想定されたので, Q11 と同じ選択肢で現在の志望について単一回答で尋ねた (Q12)。その結果が Figure8 になる。ここでも最も多いのが民間企業就職 18 名 (31.6%) であり, 次いで国家公務員・地方公務員が 10 名 (17.5%), 本研究科への大学院進学が 9 名 (15.8%), であり, 東北大学の他の研究科への大学院進学 5 名 (8.8%), 東北大学以外への大学院進学 4 名 (7.0%), 中学・高校の教諭 2 名 (3.5%) となっており, 「まだ決まっていない」も 9 名 (15.8%) いた。

これらの希望進路の経年変化について, 1 年次に選択したものを 2 年次でも選択しているかどうか (連続して選択した者を「希望維持」, 2 年次に選択しなくなった者を「希望消失」と命名), あるいは, 1 年次に選択していなかったものを 2 年次で選択するようになっ

Figure8 検討している卒業後の第1志望の進路（単一回答）（ $N=57$ ）

たかどうか（1年次に選択していなかった項目を選択した者を「希望出現」、2次点とも希望していない者を「希望なし」と命名）という点で検討したものが Table5 である。サンプル数は2回とも協力が得られた  $N=52$  であり、項目ごとの総計がサンプル数となる。なお、1年次の「東北大学の大学院進学」を2年次には「東北大学大学院教育学研究科への大学院進学」と「東北大学の他の研究科への大学院進学」に細分化したことから直接的な比較は不可能であるが、1年次と2年次の順に「東北大学×同教育学研究科への進学」「東北大×他研究科への進学」「他大学の大学院への進学×東北大他研究科への進学」「他大学の院×他大学の院進学」の組み合わせで検討することとした。

Table5 進路希望先の変化

	1年次	2年次	希望維持	希望消失	希望出現	希望なし
東北大×教育学研究科 進学	24	24	19	5	5	23
東北大×他研究科 進学	-	7	5	19	2	26
他大学の大学院×他研究科 進学	-	7	6	9	1	36
他大学の大学院×他大学の大学院 進学	15	12	11	4	1	36
国家公務員・地方公務員	22	27	17	5	10	20
中学・高校の教諭	8	6	5	3	1	43
民間企業就職	28	32	24	4	8	16
まだ決まっていない	13	8	6	7	2	37
まだ考えられない	4	2	1	3	1	47
進路検討_その他:	0	1	0	0	1	51

$N=52$

1年次、2年次の列には  $N=52$  の度数が示されているので、2年次のデータを元とした表の数値は異なる。

Table5の結果をしてみると、東北大×教育学研究科では、1年次2年次ともに24名が選択しているが、希望維持が18名で希望消失が5名、希望出現も5名いることがわかる。また、東北大×他研究科進学は希望消失が19名いることから、1年次に東北大学の院進学を選択した24名のうち19名が教育学研究科を志望していた可能性が高いことが示されている。また、他大院×他研究科ならびに他大院×他大院では、希望維持がそれぞれ6名と11名いることが示されており、大学院進学を検討している学生も、複数の選択肢を検討している姿がうかがえ、院に行くからといって必ずしも本学の教育学研究科だけを志望しているわけではないことが示唆されよう。また、希望出現の度数をしてみると、国家公務員・地方公務員で10名、民間企業就職で8名おり、全体として公務員・民間企業就職への増加傾向もうかがえている。

さらに、2年次に選択した進路の第1希望ごとに、1年次に検討していた進路の度数を示したものがTable6である、「(計)」は、各項目で2年次に第1志望としている人数（Figure8のうち1、2年次に協力を得られたN=52の値）であり、これらの人数の学生が1年次にどの進路を検討していたかを示すものである。2年次の第1希望と同じ選択肢を検討していると回答した学生はもちろん多いが、2年次に民間企業就職を第1希望にしている14名のうち、1年次にも民間企業就職を検討していたものは12名であり、公務員7名、東北大への院進学4名、未決定4名の検討があったことがうかがえる。同様に、2年次の公務員を第1希望にしている学生も、1年次に公務員を検討していた学生は7名にとどまり、次いで民間企業就職と東北大学への院進学がともに5名いたことが示されている。これらはいずれも、民間企業就職、公務員、大学院進学という大きな3つの選択肢の間でも、希望する進路が変わりやすく、進路についての思索はまだ揺らいでいるところであるといえよう。

Table6 1年次の検討進路と2年次の第1志望の関連

2年次の第1希望	(計)	1年次の検討進路						
		東北大への院進学	他大学院進学	公務員	中学・高校の教諭	民間企業就職	未決定	未決断
東北大学大学院教育学研究科への大学院進学	9	8	4	3	1	4	1	0
東北大学の他の研究科への大学院進学	5	2	4	1	0	1	1	1
東北大学以外の大学院進学	4	4	4	0	0	1	1	1
国家公務員・地方公務員	10	5	1	7	2	5	2	0
中学・高校の教諭	2	0	0	0	2	0	0	0
民間企業就職	14	4	2	7	2	12	4	0
まだ決まっていない	8	1	0	4	1	5	4	2
小計(N=52)		24	15	22	8	28	13	4

Q13 現時点での東北大学での学生生活満足度（Figure9）は、「まったく満足していない（1）」と回答した者はおらず、「4」「大変満足している（5）」と回答したもので 47 名（82.4%）を占めるなど全体として満足度は高かったが、「3」が 4 名（5.8%）「2」が 6 名（8.7%）いた。1 年次の同じ質問では、「4」「大変満足している（5）」と回答したもので 50 名（80.6%）でありまた、「2」が 3 名（4.8%）、「1（まったく満足していない）」が 1 名（1.6%）であったこと、さらに「3」と回答していた者は 1 年次で 8 名（13.8%）、2 年次で 4 名（5.8%）と減少していることから、満足しているもの多数とそうでない少数に分化している傾向にあるとも思われる。参考までに 1 年次と 2 年次の学生生活満足度について、それぞれ平均値を見てみると 1 年次で  $M=3.88$ ,  $SD=0.83$ , 2 年次で  $M=3.94$ ,  $SD=0.90$  ( $r=.57$ ,  $p<.001$ ,  $t(51)=-.52$ ,  $n.s.$  Cohen's  $d=.07$ ) であり、サンプルとなった 52 名の東北大学での生活満足度は統計的に有意な差がみられなかった（Figure10）。

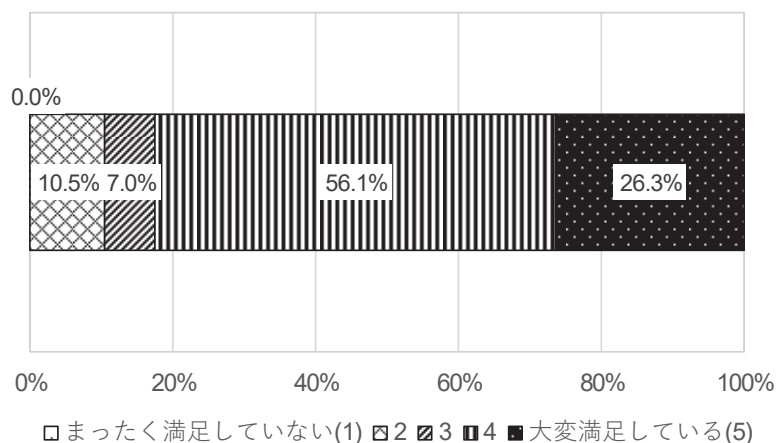


Figure9 東北大学での学生生活満足度（2年次）

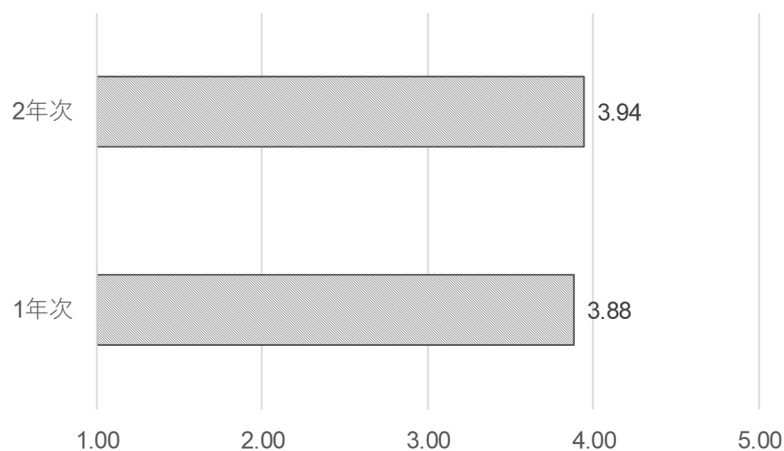


Figure10 年次別の学生生活満足度平均値（N=52）

最後に、Q14 現時点での教育学部での学びの満足度 (Figure11) については、「4」「大変満足している (5)」と回答をあわせても 44 名 (77.2%) であり、「1 (まったく満足していない)」は 0 名だったものの、大学生生活全般に比して満足度は若干低い結果であるといえよう。

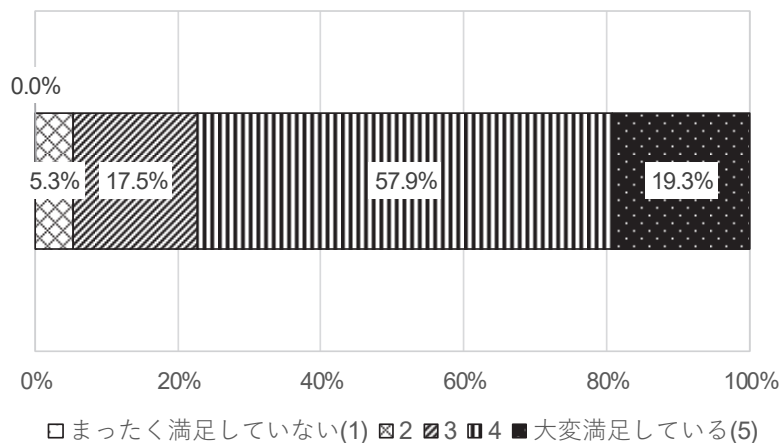


Figure11 東北大学教育学部での学びの満足度 (2 年次)

### 【まとめ】

現在のコースへの所属感については、概ね 9 割以上が肯定的にとらえていた。ただ、逆転項目として設定されていた「3.今でも現在所属するコースでよかったのか悩んでいる」については、「(やや) そう思う」と回答した者が 15 名おり、コースに所属感を感じつつも、まだ専門性について揺らいでいる姿も少数ながら見られているといえよう。

指導教員決定のための研究室訪問については、9 月末のオリエンテーションで改めて周知されているものの、11 月に入ってから本格化していることが示されていた。この点について第一筆者の研究室訪問に来た学生数名に尋ねたところ、やはり、10 月に後期の授業が始まり 1 ヶ月が経ったところでようやく、それぞれの教員の授業や専門性についておおよその把握が可能となり、それを踏まえて訪問に動き出す流れがあったようである。また、半数以上の学生が 3 名以上の教員を訪問しており、訪問前に数名まで絞り込んだ上で実際に研究室訪問を行い、その後に志望する先生を 1 名に絞り込む学生が相対的に多いことが示された。一方、訪問の事前に、特定の志望がいなかった学生も 13 名 (22.8%) おり、訪問前から指導教員を決めていた確定群や、事前に 2, 3 名に絞り込んでいて訪問後に決定した確認群よりも指導教員決定にかかる熟慮度は高く、中には 9 名以上の教員を訪問した学生もいたことが示されていた。しかし、この指導教員決定の状況 3 群と 1 年次必修科目 (教育学への招待, 教育学研究入門) への受講評価との関連について検討した結果では、群間に受講評価の得点に差は見られず、1 年次の必修科目への評価が直接的に指導教員の決定に影響を及ぼすものではないことがうかがえていた。また、3 年次進級に対する気分

について1年次のコース決定時との感情と対比で検討した結果では、相対的に1年次に比して肯定的感情が上昇し、否定的感情が低下していたことも明らかにされていた。

1年次必修科目の受講評価と指導教員決定の状況との関連については、新たに設定された「教育学への招待」や、特に、指導教員決定への情報提供として学部所属教員の全員の顔出しと研究テーマの紹介を行った「教育学研究入門」の実効性を見るために検討を行ったが、両者に直接的な関連は見られなかった。ただ、この結果は、両科目の実効性がないと結論づけられるものではなく、改めてこれらの科目が学部の学びにおける導入として位置づけられるものであることを意味しているのであろう。実際には、これらの講義の学修状況やコース決定をベースに、2年次以降の学部共通科目、学部専門科目の履修計画が組み立てられ、さらにはそれらの履修科目における学びを踏まえて、指導教員決定につながっていくという実質的なプロセスが想定される。すなわち、1年次必修科目から2年次の学びを通して指導教員決定状況につながる逐次的なモデルが想定されることにもなる。その意味で、これら1年次必修科目のみならず、2年次における履修科目の学修状況において、いかに指導教員の研究テーマや専門性について理解を深めていくか、あるいは、オリエンテーションなどを通して、教員の研究テーマについて周知を徹底していくか、という点も今後検討が求められていると言える。その点に関し、指導教員決定の際に悩んだことや欲しかった情報について自由記述で回答してもらった(Q8)中に、教育政策科学コースで指導教員決定に資するオリエンテーションを実施していることについての謝意と他のコースでも実施してほしいとの要望が寄せられていたことは、参考にすべき点であるといえよう。また、3年次の進級に向けての感情が、1年次に測定した指導教員決について考えた際の感情よりも肯定的感情が高く、否定的感情が低いといったことも、全体としては指導教員が決定した後の3年次での学びに前向きになっていることを示すものであるといえよう。

指導教員変更についての認識では、「知らない」と回答をしたものが44名と2/3以上いることが示された。今回の調査の項目として設定したことで、改めてこうした仕組みが存在することが周知できたのではないかと思われるが、今後、本調査が行われなくなった世代においても、周知がなされるような配慮が必要であろう。片や、2年次に実施された転コースについては、逆に2/3近くが「知っていた（が転コースはしなかった）」を選択しており、転コース制度は一定の周知がなされていたことがうかがえた。この点も現在の1年生の認識状況と合わせて、今後とも周知を続けていく必要が指摘できよう。

卒業後の進路については、民間企業就職が最も多いのは1年次と同様であるが、公務員・地方公務員が22名から27名と増加し、24名であった東北大学（教育学研究科）への進学よりも多い結果となった。また、今回、1年次に「東北大学の大学院進学」としていた選択肢を「東北大学大学院教育学研究科への進学」と東北大学の他の研究科の大学院への進学」の2つにわけることとしたことで、教育学研究科以外の東北大学の大学院への

進学を検討している学生がいることも浮き彫りになった。さらに、1年次との選択した項目の変化を見てみると、昨年と同じ選択肢を選んでいる率は高いものの、1年次には希望していたものを2年次に希望しなくなっていたり（希望消失）、逆に1年次には希望していなかったものを2年次に希望するようになっていたり（希望出現）と、希望進路についてそれなりに変動している姿もうかがえており、特に民間企業と公務員の増加が目を行っている。このことは、複数回答の選択肢を1人平均2.23個選択しており、1年次の2.16から微増していることから進路について揺らいでいることがうかがえよう。また、検討している進路の第1志望について単一回答で答えてもらった結果では、民間企業就職が18名、国家公務員10名、本研究科への進学が9名、東北大学の他の研究科への大学院進学が5名、東北大学以外の大学院進学が4名と大学院進学の実績が多様であることがここでも確認できる。同時に、2年次の第1希望の進路ごとに、1年次に進路先として検討していた物を見た結果においても、必ずしも2年次の第1希望を1年次の検討事項として挙げているわけではなく、1年次から2年次の進路についての思索は揺らぎやすく、定まっていなかったものであるともいえよう。このことはむしろ、古典的なEriksonによるアイデンティティ論に基づけば、モラトリアム期として役割実験を行う中で自らが引き受ける社会的な役割を模索する時期でもあることと照らし合わせれば、ある種、青年期後期として健全な傾向を示しているといえるのかもしれない。ただ、一方で、21世紀に入り国際的な産業の流動化と高度な情報化が進む現代日本においては、もはやErikson流のアイデンティティ論では説明困難な状況になっており（溝上，2016）、流動的な人間関係において、それぞれの所属集団や社会的文脈ごとに自らの異なった自己を呈示することで、複数の顔を持つ多元的な自己を有するようになってきているという（浅野，2016）。そのことを踏まえた時、東北大学教育学部の学生であるという地位、あるいは、所属コースへの所属感、所属研究室における居場所感といったものが問われるようにもなろう。指導体制については、原則、各指導教員の教育理念や方針に依るものではあるものの、改めて、「現代社会が抱える教育の諸問題を総合的かつ体系的に把握し、その解決を具体的に推進しうる人材を養成」という本学部の教育理念を果たすためにいかなる研究指導、学生指導が求められているのかを考える必要があるのかもしれない。

東北大学での学生生活満足度については、全体的には満足する傾向に多いが、満足していない方向の選択肢である「2」の人数が微増しており、満足しているもの多数とそうでない少数に分化している傾向にあることも考えられた。また、東北大学教育学部での学びの満足度について満足している方向で回答した者は77.2%であり、大学生活全般に比して満足度は若干低い結果であることが示されていた。

以上、散発的ではあるが、2年次終了時における新カリキュラム1期生（2022年度新入生）の指導教員決定に向けての状況を検討してきた。なにより、指導教員決定の研究室訪問を2年次後期に位置づけることで適切な指導教員選びが可能かどうかという点が、新カ



リキュラム検討時においても懸念されていたが（学部カリキュラム改革ワーキング・グループ，2021），本報告の結果を見る限り，熟慮が必要な学生はいたものの，それほど大きな混乱もなく志望する教員を決定したように見受けられる。しかしながら，一般的な他の調査に比して高い回収率を示しているといえども，そもそも東北大学や学部教育の学びになじめていないからこそ，調査にも協力しない層があり，そうした学生が調査協力を得られなかった 24%の中に存在することを踏まえると，今回の結果に安堵してはいけないのかもしれない。今後は，3 年次の指導教員変更願いの周知の徹底を行うとともに，学部専門教育が本格化していく 3，4 年次の学修の中での，指導教員との関係性についても目を向けていく必要があるだろう。

また，卒業後の進路の検討先とし 1 年次の結果と比較してみると，全体的に民間企業就職が多い点は変わりなかったが，公務員を希望するものが増加している点が目を引いていた。また，東北大（特に教育学研究科）を希望する数は大きく変わらなかったが，今回，東北大学への進学を教育学研究科と他の研究科とに細分化したことで，必ずしも教育学研究科のみを進学先として検討しているわけでもないことが明らかにされた。また，1 年次に比して，検討する進路として選択する数も微増しており，進路に悩む姿もうかがえていた。これらの希望進路がいよいよ進路選択が本格化してくる 3 年次以降にどのような経路をたどるのかについても検討を続ける必要があるだろう。

### 【謝辞】

2021 年度に学部カリキュラム改革ワーキング・グループのメンバー，ならびに令和 3，4 年度の教務委員会委員，教務係のみなさまに感謝申し上げます。

### 【付記】

本報告は，2023 年度東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター2023 年度「プロジェクト研究（企画研究）」課題名「2022 年度教育学部新カリキュラムに対する学生意識調査 —2 年次の指導教員決定プロセスを中心に—」（研究代表者：神谷哲司，研究組織：野口和人・小嶋秀樹・佐藤克美・後藤武俊・若島孔文，申請額申請額：¥249,765）として実施されたものの一部である。なお，本研究に関する利益相反はない。

### 【文献】

浅野智彦（2016）．流動的社会の中のアイデンティティ．梶田叡一・中間玲子・佐藤徳（編著）．現代社会の中の自己・アイデンティティ．金子書房．pp86-105.

学部カリキュラム改革ワーキング・グループ（2021）．学部カリキュラム改革ワーキング・グループ報告．東北大学教育学部令和 3 年 11 月 17 日学部教授会資料．（未刊行）

原田克巳・滝脇裕哉．（2014）．居場所概念の再構成と居場所尺度の作成．金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要，6，119-134.

神谷哲司・後藤武俊・佐藤克美・小嶋秀樹・野口和人（2023）. 2022年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告（第1報）—1年次学部専門科目の履修とコース決定を終えて—. 東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター年報, 23, 1-11.

溝上慎一（2016）. 青年期はアイデンティティ形成の時期である. 梶田叡一・中間玲子・佐藤徳（編著）. 現代社会の中の自己・アイデンティティ. 金子書房. pp21-41.

小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人.（2000）. 一般感情尺度の作成. 心理学研究, 71（3）, 241-246.